

Q14b

全天X線監視装置 MAXI/GSC による星生成領域からのX線観測

鵜澤明子、坪井陽子、松村和典、山崎恭平(中央大学)、中平聡志(青学大)、佐藤亮太、川崎一義、上野史郎、富田洋、足立康樹、板本康治、小浜光洋(JAXA)、松岡勝、三原健弘、杉崎睦、鈴木素子、中川友進、山本堂之(理研)、石川真木(総研大)、常深博、木村公(大阪大)、河合誠之、森井幹雄、杉森航介、薄井竜一(東工大)、吉田篤正、山岡和貴、小谷太郎(青学大)、根来均、中島基樹、小澤洋志、菅原彩(日本大)、上田佳宏、磯部直樹、江口智士、廣井和雄(京都大)、山内誠、大休寺新(宮崎大)、ほか MAXI チーム

星は、濃い塵やガスの中で生まれる。星本体の情報を得るには透過力の強い2keV以上のエネルギーを持ったX線で観測することが有効である。昨年8月に打ち上げられた全天X線監視装置 MAXI(Monitor of All-sky X-ray Image) に搭載されている GSC (Gas Slit Cameras: ガス比例計数管) は、2-10keV の帯域で1日10~20mCrab と高い感度を持つ。そこで我々は MAXI/GSC が星生成領域において無バイアスの研究をする際に有効であると考え、フレアなどの時間変動の有無、領域ごとのスペクトルの特徴、について調査を進めている。本講演では、観測が開始された2009年8月15日から現在までに得られた全積分データを用いて得られた詳細な解析データについて、過去の論文や他波長の結果と交えながら議論する予定である。